

第二章 近江君の物語 娘の処遇に苦慮する内大臣の物語

[第一段 内大臣、近江君の処遇に苦慮]

大臣(藤原殿は)、この*北の対の今姫君を(その北の対に住まわせている新しく引き取った姫君を)、 *注に<近江の君が「北の対」にいることが注意される。>とある。「北の方」といえば多くの場合<奥方>を意味するかと思うが、「北の対」は南表に対して北奥の裏方という語感だろうか。納戸や倉庫などに備品を収納して置くような場所だろうか。「注意される」と注にあるが、「北の対」の意味合いが示されていないので、どう考えて良いか分からず、何となく姫のことは表沙汰にしたくないような内大臣邸内の雰囲気、くらいを思う。

「いかにせむ(どうしたものか)。*さかしらに迎へ率て来て(夢占いを早飲み込みして迎えに行つてまでして引き取ってきたが、)。人かく誹るとて(評判がこうも悪いからといって)、返し送らむも(母方に送り返したのでは)、いと軽々しく(いかにも場当たりで軽々しく)、もの*狂ほしきやうなり(信念の無い何とも信用できない遣り方だ)。 *「さかしらに」は<一見賢いかのように>という語感で、つまりは<見込み違いで>だから<早合点で>だろう。それでこの姫の場合は、蜚第三章第五段の藤原殿の夢解きで占い師が<落し種が現れる見込み>と答えた事が評判となって、名乗りを上げて来た者の内の一人と言った事情らしいから、その<見込み>の「真」解答は源氏殿預かりの対の姫のようだが、この姫も落し種ではあるようで「偽」ではなさそうだが、人物の優劣に於いて<見込み違い>の「外」ではあったようだ。 *「くるほし」は<正気で無いような、気違いじみている>と古語辞典にある。が、「狂ふ」の原義は<くるくる回って定まらない>ということらしく、此处でも<正気ではない>ではなく<確たる判断基準が無い→信念が無い>ということだろう。藤原殿としては恥ずべき態度、に違いない。

かくて*籠めおきたれば(しかし、こうして奥に囲って置いたのでは)、まことにかしづくべき心あるかと(あの出来の悪い娘を、私が本気で貴女としてお世話する心算らしいと)、人の*言ひなすなるもねたし(世間が思い込むのも心外だ)。 *「籠め置く」は<奥に隠し置く>で、これが「北の対」の意味なのだろう。 *「言ひなす」は<言葉で形を作る→聞いた人は(見たことも無いものを)そのように思う>で、「なる」は<それが定着する>だから<思い込む>。

女御の御方などに*交じらはせて(女御付きの官女として出仕させて)、さるをこのものにしないでむ(然るべき行儀作法をこの者に仕付けることにしよう)。 *「まじらふ」は<社交する>で、弘徽殿女御の御部屋は後宮なので「御方」といっても普通の部屋女房ではなく、とはいえ公式の中宮職のような公費官女ではないが、帝の妻である女御に仕えるのだから職域はそれと同様の私費官女というべき地位、だったように理解する。それに、高位の女御であれば私設秘書の給与も込みで歳費が支給された可能性は高そうだ。

人のいとかたはなるものに言ひおとすなる容貌(女房たちがひどく不器量だと貶しているらしい姫の顔立ちは)、はた(宮仕えで世間に曝しても)、いとさ言ふばかりにやはある(そう酷く言うほど見っとも無くは無いだろう)」

など思して(などとお考えになって)、*女御の君に(寝殿に里下がりしていらっしやる第一姫の弘徽殿女御に)、 *「女御の君」の<寝殿に里下がり>は下文の注釈の先読みだが、語りの運びからしても、二

の姫の部屋を訪ねた話題に続いて、「この北の対の今姫君」と言っているのだから、「この」は同じ邸内に居る事を示している、のだろう。ただ、確かに殿が出仕した明示は無いのだが、私から見て大事な事が明示されていないことが多いこの物語で、明示が無い事で理解できる事は少ないので、此处でも「女御の御方」という言い方をされると、殿が今は邸内に居るのか宮中に居るのが非常に分かり難い。

「かの人参らせむ(あの娘を貴方の所に仕えさせましょう)。見苦しからむことなどは(作法が至らず見苦しい点は)、老いしらへる女房などして(古参の女房などに)、つつまず言ひ教へさせたまひて御覽ぜよ(遠慮なく姫を注意して教えさせなさって面倒を見てください)。若き人びとの(でも、若い女房たちに)言種には(ことぐさには、陰口で)、な笑はせさせたまひそ(笑わせはなさいますな)。*うたてあはつけきやうなり(それでは、馬鹿にしすぎる)」 *「うたて」は<ひど過ぎる>。「あはつけし」は<軽率だ、軽々しい>と古語辞典にある。「やう」は<処遇の仕方>なのだろう。直訳風に言えば<ひど過ぎる軽々しさの処遇になってしまう>だが、それは今だと普通<バカにしすぎだ>と言う。そして「しすぎだ」という言い方は、ある程度はしょうがない、当然そういうことにはなるだろうが、行き過ぎて大事にならないように上手く取り計らってくれ、という管理依頼だ。

と、笑ひつつ聞こえたまふ(冗談めかして笑いながらお話なさいます)。

「などか(どうして)、いとさ*ことのほかにははべらむ(何もそれほど特別の事柄では無いでしょう)。中将などの(中将などが)、いと二なく思ひはべりけむ(たいそうまたとなく優れた姫と思ひ込んで)*かね言に足らずといふばかりにこそははべらめ(触れ回ってていた前評判には及ばないというだけのことに過ぎないでしょう)。かく*のたまひ騒ぐを(父上がそのように大袈裟に仰るのを)、*はしたなう思はるるにも(姫は肩身が狭くお思いでしょうし)、かたへはかかやかしきにや(同時に話題になることを照れてもいて、実力を発揮できずにいらっしゃるのではないですか)」 *「殊の外」は<思いの外の特別な事>。 *「かねごと」は「予言」と表記され<前触れ、前評判>。 *「のたまひ騒ぐ」の主語は内大臣。と注にある。 *「はしたなう思はるる」の主語は近江の君。「るる」は軽い尊敬の助動詞。と注にある。

と(女御の君は)、いと*恥づかしげにて聞こえさせたまふ(実に卒の無い応対振りでお返事なさいます)。 *「恥づかしげ」は訳文に<こちらが気恥ずかしくなるような面持ち>とある。辞書にもそのように説明がある。つまり<立派な様子>であり<卒の無い様子>、なのだろう。

この*御ありさまは(この女御の御様子は)、こまかにをかしげさはなくて(隅々まで優れているのではなくて)、いとあてに澄みたるものの(とても上品で落ち着いているものの)、なつかしきさま添ひて(親しみもあって)、おもしろき梅の花の開けさしたる朝ぼらけおぼえて(美しい梅の花が咲き出した朝のような温もりが期待できそうな印象で)、残り多かりげにほほ笑みたまへるぞ(先行きの楽しみが多そうに微笑みなさる所が)、人に異なりける(人と異なって、頼りになる)、と見たてまつりたまふ(と殿はお思い致しなさいます)。 *弘徽殿女御の「御ありさま」が語られるのは初めて、かと思う。女御は、内大臣とは時の権中納言の正妻腹の娘で、権威付けのため時の太政大臣の祖父の養子格で入内した。今上帝の即位は7年前の二月末で、女御の入内はその歳の八月だった。時に、帝 11 歳、女御 12 歳であり、仲睦まじかったと「濤標」巻に事情背景のひとつとして記されていた。それから、帝に付いては出生の秘密などの話題もあったし、その際に帝の人柄なども語られていたが、女御の人柄については、例えば絵合わせの際

には齋宮女御方に対する一方の旗頭でさえあったにもかかわらず、今まで何も語られて来なかった気がする。その意味では、その人物像を持って物語に登場するのは、是が初めてだろう。

「*中将の(それに引き換え、中将は)、いとさ言へど(とても有能だと言っても、あの娘を大そうに吹聴するとは)、心若き*たどり少なさに(未熟な世間知らずで何と頼り無い)」 *「中将」は弘徽殿女御と同じく、前右大臣の四姫である正妻腹の子供の筈だが、であれば現在 21 歳と目され、女御は 19 歳なので、二歳違いの同腹兄というわけだ。因みに、同腹弟であろう弁少将は 18 歳と思われ、対の姫が 22 歳となると、内大臣の種付けは相当に強力かと推察される。 *「たどり」は<物事の筋道、世間の道理を知ること>と古語辞典に説明される。つまり「たどり少な」は<世間知らず>だが、それだけなら「心若き(未熟な)」と同義で冗長な重ね言葉に見える。だから多分、これは「頼り少な(頼り無さ)」に掛けた洒落言葉だ。注には是を<内大臣は柏木に責任を転嫁>と解説しているようだが、是は内心文ではなく発言文だから、<転嫁>と言うよりは転嫁しようのない娘の出来の悪さを、洒落言葉で愚痴った、ということかと思う。

など申したまふも(などと愚痴を申しなさるのも)、いとほしげなる人の御おぼえかな(よほど疎ましく思われるその娘の殿の御評価の表れのように)。

[第二段 内大臣、近江君を訪う]

*やがて(それで殿は)、この御方の*たよりに(こうして女御の部屋に相談に訪ねた際なので)、*たたずみおはして(姫の処遇に迷いながら気もそぞろに北の対にお出向きなさって)、のぞきたまへば(今姫君のお部屋を覗きなさると)、 *「やがて」は<そのやうにあって>の語感で、同じ場面を引き継ぐ言い回し、かと思う。注には<弘徽殿女御は里下がりして、現在、寝殿にいる。そこから、内大臣は北の対の近江の君のもとを訪れようとする。>とある。尤も作者にしてみれば、同じ今の場面というよりは、この文は未だ上文と同一文節であるらしく、この「やがて」は第一段冒頭の「この北の対の今姫君を」に続くので、<内大臣は北の対の近江の君のもとを訪れようとする>という文意、ということだ。 *「たより」は<依頼>であり<訪問>でもあるが「御」との敬語が無いので、此処では殿や女御の具体行動を示さない。したがって、一般的なくついで、良い機会、便宜>や<縁、関係、関連>という意味での語用ようだ。ただ、女御に姫の「教育依頼」はしたのだから、そのことに掛けた洒落心の語用ではあるのだろうと読んで、単に<その際に>というよりは<相談に訪ねた際だから>としてみた。 *「たたずむ」は<立ち止まる>の他に<そのあたりをうろつく>と大辞泉にある。「そのあたり」とは<一定範囲>であり、具体的には<邸内の動線上>を意味するか。ただ、殿は迷っているのだから<考えが立ち止まっている>とも読めそうで、とすれば此処での「たたずむ」の語感は<あちこちうろつく>のではなく<心此処に在らずの覚束無い足取り>のように見える。また、「おはす」は<「居る」「有る」の尊敬語>として多く使われるが、<「行く」「来(く)」の尊敬語>とも古語辞典にある。確かに、現代語の<いらっしゃる>にも<居る、有る>の他に<行く、来る>の意味がある。で、「たたずみおはす」は<迷いながら北の対にお行きなさる>。こう言ってしまうと意識の範疇に入るかもしれないが、「たたずみおはす」を同じ字句の語感のまま言い換える現代語は無い、と思う。なので、概念として等価の語句を考えざるを得ない、かと思う。

*簾高くおし張りて(姫はあろうことか簾を上いっばいに巻き上げた奥ゆかしさの無い明け透けさで)、*五節の君とて、されたる若人のあると(派手好きな若女房と)、*双六をぞ打ちたまふ(盤双六に打ち興じなさっています)。 *「簾(すだれ)」は日除け・風除けではあるが、何よりも目隠しである。だから夏の暑い盛りに簾を上げると言っても、目隠しになる上部の三分の一くらいは垂れ下げておくのが普通、か

と思われる。「押し張る」はくあえて～する>とある。この姫君は暑い日だからと、あえて簾を上長押のハリいっばいまで手繰り上げていた、のだろう。貴人としてはくあろうことか>明け透けでたしなみの無い振る舞いのようだが、私には庶民的で好感が持てる。 *「五節の君(ごせちのきみ)」は若女房の通り名で、実際の「五節舞姫」は御所勤めに適う高位女官で、藤原家といえど今姫君の女房である筈はないが、この女房はその舞姫を思わせる美しさや華やかさがあつた、ような語感だ。 *「双六(すごろく)」は二つのサイコロを振って、その出目に従って進める敵味方のコマの優劣を競う遊戯、とのこと。ただ平安期の「双六」は、紙の上に描いた上がりマスにコマを進める現在の絵双六ではなく、専用の木製遊戯盤上で陣地を争う盤双六というもの、だったらしい。中東由来のバックギャモンという遊戯に似ているとのことだが、私はバックギャモンを知らない。ただ幸いに今なら、フリーのパソコンゲームで各種ボードゲームの遊び方が模倣できる。

手をいと切におしもみて(姫は手をとてもしきりに押し揉みなさつて、祈るように)、

「*せうさい、せうさい」 *「しょうさい」は訳文に「小賽」と表記されくサイコロの小さい目が出るようにとの呪文>のように言い換えてある。是を以つて注に代える、ということだろうか。少し不親切な気がするが、何とか察しは付く語感だ。一般に、サイコロゲームに於いては小さい目は不利であり、盤双六の説明でもゾロ目と大きい目が有利とある。だから、相手の不運を願う囃子言葉ではありそうだが、勝負であれば敵の失点を願うのは当然で、場を盛り上げる合の手だ。こういう野次は下品なのではなくて、競技に対する積極参加の表明なのだろうから、私にはその素直さが好ましく思える。ただ、姫は何歳だろうか。

とこふ声ぞ(と願う声といつたら)、「いと*舌疾きや(ひどく早口で、何とも上つ調子な落ち着きの無さだ)。あな(ああ)、うたて(情けない)」と思して(と殿はお思いになつて)、 *「舌疾し(したどし)」はく早口だ>と古語辞典にある。そして、この「疾し(とし)」はく早い>だが、「早さ」にはく機敏>という良い面とく落ち着きが無い、軽々しい>という悪い面があり、此処では後者のく口が軽くて上つ調子だ>という評価のようだ。「うたて」はく意に反して事態が暗転する語感>と古語辞典にありく嘆かわしい、情けない>に当たるとされる。悪評であり、決して滑舌の良さを褒める場面では無い。なお、注にはく「いと舌疾きや」は語り手の感想。「あなうたて」は内大臣の心中。>と文節する読み方も説明され、またはくまた、全体が内大臣の心中とも考えられる文章表現。>とも示される。私は、「乞ふ声ぞ」の「ぞ」が文型では「や」に掛かるように見えるが、意味では「うたて」にまで及ぶと読んで後者に立ちたい。

御供の人の(お付きの者が)前駆追ふをも(さきおふをも、前触れをして人払いするのを)、手かき制したまうて(手で制止なさつて)、なほ(姫らをそのままにさせたまま、さらに)、妻戸の細目なるより(妻戸を細く開けた隙間から)、障子の開きあひたるを見入れたまふ(襖が開け放たれている部屋の様子を御覧なさいます)。

この*従姉妹も(このいとこも、この遊び相手も)、はた(また)、けしきはやれる(気持ちを入れ込んで)、 *「従姉妹」は「いとこ」の読みとあり、注にはく五節の君をさす。>とある。「いとこ」はく四親等の血縁>を言う他にく親しい若者>と古語辞典にある。此処では、遊び相手の若女房のことだ。であれば、平仮名表記か「愛子」にするべきではないのか。

「*御返しや(おんかへしや、行くわよ)、御返しや」 *「かへし」は広い意味ではく仕返し>かも知れないが、遊戯であれば盤上を客観的に見る方法の約束事として、参加者の一行動に対する一定の効果、この場合な

らサイの目だが、毎に攻守を裏表に反転させるワケなので、その表裏を<返し>て自分が攻勢の番(MY-TURN)になった、という意味の、「さあ行くぞ」という掛け声と読むべきだろう。

と、*筒をひねりて(筒の中でサイコロを転がして)、とみに打ち出でず(すぐには振り出しません)。*「筒」は「どう」と読みがあり<サイコロを振る筒(つつ)>と古語辞典にある。この「ひねる」は<ねじる>ではなく<いじる、遊ぶ、試す>と興を盛り上げる、勿体をつけて期待値の伸びを膨らませるようなこと、かと思う。無駄にサイを振り回すのは誰でもやることだ。「とみ」は「頓(トン)」という漢字が基になった言葉で<即座にする>という意味らしい。「とみに」は<急には>。

中に思ひはありやすらむ(心中には悩みも有るのかも知れないが)、いとあさへたるさまどもしたり(ひどく軽薄な様子に見える二人なのでした)。

容貌は*ひちちかに(姫の見た目は元気が良く)、愛敬づきたるさまして(人懐っこい顔つきで)、髪うるはしく(髪は美しく)、罪軽げなるを(素直そうだが)、額のいと近やかなると(額がとても狭いのと)、声のあはつけさとにそこなはれたるなめり(声の上つ調子さとに貴人の品が損なわれているようでした)。*「ひちちか」は<[形動ナリ]《「ひち」は擬態語》びちびちして元気のいいさま。>と大辞泉にある。この語は濔標第五章第二段の時の前斎宮とは今の梅壺中宮を源氏殿が見た印象としても使われていて、其処でも「ひちちかに愛敬づきたまへるけはひ」とあって、「愛敬づく(人懐っこい表情)」の補足のよう修辞させていた。「ひちちか」は「愛敬」の要素、または少なくとも無愛想の要素ではないもの、なのだろう。また、「罪軽げ(前世の業が深そうでは無い→特に悪い因縁も無さそう→屈託が無い)」ともあるので、姫は概して無邪気ないし素直そうな印象だから、この「ひちちか」は<元気良く>で良さそうだ。

取りたてて*よしとはなけれど(だから取り立てて優れているとは言えないが)、*異人とあらがふべくもあらず(赤の他人とはとても言い張りようもなく)、鏡に思ひあはせられたまふに(鏡の自分の顔と似ているとお思いになれば)、いと宿世心づきなし(殿は実に廻り合わせの悪さを嘆きなさいます)。*「よし」は最上評価であり、「よろし」の<悪くはない>という消極評価ではなく<優れている>という積極評価、と古語辞典にある。*「ことひと」は<赤の他人>。

「かくてもものしたまふは(此処のお暮らしは)、つきなくうひうひしくなどやある(性に合わず馴染めなくはありませんか)。ことしげくのみありて(忙しくて)、訪らひまうでずや(今まで様子を見にも来れませんでした)」

とのたまへば(と殿が仰ると)、例の(姫は例によって)、いと舌疾にて(とても早口で)、

「かくてさぶらふは(こうして居りますのに)、何のもの思ひかはべらむ(何の不足も御座いません)。年ごろ(長年)、おぼつかなく(手立ても付かず)、ゆかしく思ひきこえさせし御顔(お会いしたいと思ひ申ししていました御顔を)、常にえ見たてまつらぬばかりこそ(いつも拝し奉りませんことだけが)、*手打たぬ心地しはべれ(手詰まりの負い目に感じられます)」 *「手打たぬ心地」は、注に<『集成』は「まるでよい手を打たぬ時のような(焦れたい)気がいたします。「手打つ」は、双六で、巧みな手を打つこと」と注す。>とある。「手を打つ」は確かに<盤上で有効な作戦を講じる>という意味で現代語に引き継がれている。ただ、此処では父である殿に対して姫の謙遜の言上なのだから、「手打たぬ」は<良い手を打た

ない>ではなく<相手の攻勢に有効な手が打てず、追い込まれた>という語感かと思う。そういう意味で使えるから、作者はこの場違いな語を敢えて洒落言葉として品の無い姫に言わせた、のだ。

と聞こえたまふ(とお応えなさいます)。

「げに(いつも会うということなら、現に)、身に近く*使ふ人もをさをさなきに(身近に仕える女房が足りないので)、*さやうにても*見ならしたてまつらむと(そのように身の回りの世話をしてもらう形ででも慣れ親しんでいただこうかと)、かねては思ひしかど(かねては思ったことも在ったが)、えさしもあるまじきわざなりけり(実の娘にそうした女房の真似は、とてもさせられないことでした)。 *「つかふ」は女房が殿に<仕える>であり、「仕ふ」と表記するべき、に思う。殿が女房を<使う>のなら「遣はす」、に思う。 *「さやうにて」は、さすがに<そういう女房として>などと娘にわざわざ言う父親は居ないだろうから、<そのような形にして>ということなのだろう。同様に、下の「えさしも(とてもそのようには出来ない)」の「さ」も<女房>ではなく<女房のように>だ。 *「見馴らす」は<慣れさせる>であり<馴れる>のは姫だ。殿が<馴れる>のなら「見馴らふ」であり、丁寧に且つ相手を敬って言うなら「見馴らひはべりたまふ」くらいだろうか。だから「見馴らし奉る」は<馴れて頂く>だ。

なべての仕うまつり人こそ(普通に仕えている女房であれば)、とあるもかかるも(勤めるように成った経緯や性格の違いが有っても)、おのづから立ち交らひて(それぞれの仕事に応じて人に交じって立ち働いて)、人の耳をも目をも(誰の耳目にも)、かならずしもとどめぬものなれば(特に障らずに済んでいれば)、心やすかべかめれ(心配要らないだろう)。それだに(それでも)、その人の女(だれその娘だの)、かの人の子と(どこそこの子だのと)知らるる際になれば(世間に知られる名門の家柄の子息であれば、少しの落ち度でも大袈裟に吹聴されて)、親兄弟の(おやはらからの、その親兄弟の)面伏せなる(おもてぶせなる、不名誉となる)類ひ多かめり(例が多いものだ)。まして(まして、それが…)

とのたまひさしつる(と言葉を継ぎかねなさった)、御けしきの*恥づかしきも知らず(殿の立場の無さも姫は思い至らず)、 *「恥づかし」は、多くは「恥づかしげ」などの語用で<相手が気後れして恥じ入るような立派な態度>を意味することがある、が此処は本人が恥じ入る<立場の無さ、居た堪れなさ>だ。殿は何に恥じ入るのか。それは先祖であり、藤原家の家格に対してだ。「まして」と言い差した言葉を敢えて継げば、<まして、その女の家柄が我が藤原一門とあっては先祖に申し訳が立たない>であり、殿にとってこの姫はそういう残念な娘だったワケだ。

「*何か(少しも)、そは(そんな御心配は要りません。)、ことごとしく*思ひたまひて交らひはべらばこそ(特に家柄を意識させていただいてお仕え致しましたなら)、所狭からめ(窮屈な思いも致しましょうが、)。*大御大壺取りにも(私は気にしませんので、御便器係りでも)、仕うまつりなむ(御仕え致します)」 *「何かそは」は反語表現。省略下文は<そは、心やすかべからぬはべる>くらいか。とにかく姫は、殿が懸念するところの家損のおそれを、殿が言い差して敢えて明言しなかったことを良いことに、自分が被る負担感、と手前勝手に取り違えたらしい。殿に言わせれば、「お前の所業が家名に及ぼす迷惑が心配なんで、お前自身の苦労を心配しているんじゃない」ということだが、姫は子供心に殿の親心を期待してか、はたまた下層育ちの図太さからか、「私の気苦労を案じてくれている」と取りたかった、ということだろうか。殿が言い差した「まして」の下は、姫には<まして、家柄が天下の藤原一門とあっては、さぞお前には荷が重いだろう>とでも

聞こえたのだろうか。こういう貴人と庶民の思い違いのズレは落語の基本的な構図だ。*「思ひたまふ」の「たまふ」は聞き手に対する丁寧語で、「思ふ」のは姫であり、わざとらしい言い方だが「思わせていただく」>くらいの感じ、かと思う。殿が「思ふ」のなら「思し召す」あたりだ。*「大御大壺」は「おほみおほつぼ」と読む。「大壺」はくしびん、おまる、便器>で、「取る」はその始末をするのだから、「大御大壺取り」はく便器係りの下女>だ。用を足すのは貴人だから「御大壺」は女房たちが普通に使う言葉のように見える。それに「大」が付くのはく大殿の御用達>だからだろうか。何れ、「大御大壺取りにも仕うまつりなむ」とは、およそ姫君の言葉とは思えない。

と聞こえたまへば(とお応えなさると)、え*念じたまはで(殿は思わず)、うち笑ひたまひて(笑い出さなさって)、*「念ず」はくがまんする>。ただ、「え念じたまふ」はくずっと我慢していたものが遂に耐え切れず>という理屈よりは、くそのまま静かにしていられなくなって→思わず>という語感のようだ。尤も、「うち笑ふ」の「うつ」はく「つい」という突発感>だから、「うち笑ふ」をく思わず笑う>としても良さそうだが、折角「え念じたまふ」とあるのだから此方をく思わず>として、「うち笑ふ」はく笑い出す>とした。

「似つかはしからぬ役ななり(さすがにそれは、あなたに似つかわしくない仕事でしょう)。かく*たまさかに会へる親の孝せむの心あらば(このようにやっと巡り会った親に孝行しようという気持ちがあるなら)、このもののたまふ声を(そのお話になる声を)、すこしのどめて聞かせたまへ(少し遅くして聞かせてください)。さらば(そうすれば)、*命も延びなむかし(私の寿命も延びそうです)」*「たまさかに」はく何度か機会があれば>という場合とく本当に珍しく>という場合とがある。となると、それは「会へる」の意味に左右されるだろう。さて「会へる」の「る」だが、状態の助動詞「る」は動詞の未然形に付く、と古語辞典に説明されており、「会ふ」はハ行四段活用の自動詞なので未然形は「会は」であり、合致しない。なので「会へる」はく会っている>やく会うことができる>の意味にはならない。となると、「会へる」の「る」は完了の助動詞「り」の連体形だ。「り」は四段活用の命令形語尾に付くと説明されており、合致する。したがって「会へる」はく会ったところの>という意味であり、「たまさかに会へる」はく何とか巡り会った>またはく何故か巡り会ってしまった>くらいの意味になる。つまり、与謝野訳文が正である。*「命も延ぶ」はく寿命が延びる>でく安心できる、安堵する>と同じ意味だ。この言葉は現代語でもあるし、特に言い換えなくても実感できる、ように思う。が、少し理屈を考えたい。この反対語はく寿命が縮む>だが、これは心配事が在って気が休まらない時に使う。そういう時は実際に、疲労感や消耗感が強くて身が縮み、身が細り、寿命が短くなる気がするものだ。だから、心配事が無くなれば手足が伸びて、豊かな気分になり、寿命が長くなる気がする、というワケだ。

と、*をこめいたまへる大臣にて(冗談好きでいらっしゃる藤原殿なので)、*ほほ笑みてのたまふ(姫への懸念も呑気そうな言い回しで、笑いながら仰います)。*「をこめく」は「痴めく」と表記しく愚かなようすをする。ばかげている。ふざける。>と大辞泉にある。が、殿はおどけてはいない。「をこめい」の「い」は「をこめき」の「き」の音便でもあるだろうが、それだけではなく、「をこめく」の「をこ(バカ)」「めく(げる)」の「めく」を更に一段と婉曲化した「をこめきめかす」みみたいな言い回しのく馬鹿げているかのような>の語感で、具体的にはく冗談好きで>くらいのことを言っている、ように見える。*「ほほ笑みてのたまふ」はく笑って仰る>だ。そう書いてあるのだから、それで良いと思う。ただ何だか、殿の言葉を此処で私なりに整理したくて、く呑気そうな言い回し>と「命も延びなむかし」の感想を書いた。

[第三段 近江君の性情]

「舌の*本性にこそははべらめ(舌が生まれつき短いという本性の所為のようです)。幼くはべりし時だに(物心付かぬ時から)、故母の常に苦しがり教へはべりし(亡くなった母がいつも私の話し方を嫌がって直そうとしておりました)。*妙法寺の別当大徳の(法華経暗誦の妙法寺の早読みに秀でた主管様の早口に)、産屋に*はべりける(産屋で安産祈願を頼んでいた読経の声で)、*あえものとなむ嘆きはべりたうびし(感化されてしまったものだと言っていておりました)。いかでこの舌疾さやめはべらむ(どうしたらこの早口を止められるのでしょうか)」 *「ほんじゃう」はく生まれつきの性質。本来の性質>と大辞林にある。現代語だとく本性が表れる＝地金が見えた→化けの皮がはがれた>という語用で<隠し切れない欠点>みたいな語感だが、此处では寺つながりの仏教用語っぽい、とは学術用語風の客観的に物の性質を言う、語用に見えて、例えばく舌が生まれつき短い>と言っているような語感で、恥じている、困っている、ような気持ちが伝わらない。こういう言い方を意図して言っているのか、素直な思いなのかは分からないが、客観的には、殿の姫に対する人格否定を、姫は一部の性能不良という認識で凌いだ、ことになりそうだ。それも、その気負いなのか、それこそ本性なのか分からないが、学の有りそうな、しかし場違いな「本性」という言葉を無理やり持ち出した固さやぎこちなさを感じさせる物言いだ。大臣がはっきりと気に障る、と言っている事を思えば、如何にも変な答え方に見える。大臣の言葉を額面通りに受けた素直に返事なら、普通は「すみません。気をつけます」だろう。 *「みゃうほふじ」はく近江国神崎郡高屋郷にあった寺>と注にある。「あった寺」ということは現存する寺ではなさそうだが、此处の文はこの姫の生い立ちに関連して、その特徴に影響を与えたかのような言い方に思えるので、何らかの背景になる記事があるなら知りたいと思いWeb検索したが、「妙法寺」というと現代仏教や古くても江戸時代からのものだけで、平安期まで辿れるものは見つからなかった。ところで「近江の君」で検索すると、「広島大学学術情報リポジトリ」に原田敦子という方の「源氏物語」考察文掲載があり、その中に「妙法寺」を「近江国神崎郡高屋郷」とする根拠は、室町時代の源氏物語注釈書である「河海抄(かかいしょう)」の指摘によるものようだが、真偽は定かでない、との指摘があった。「河海抄」は室町初期の1360年代の作成とされ、その当時に源氏物語の推定成立時から300年くらいは経っているし、鎌倉期の後の南北朝の混乱期であれば、資料の散逸や由緒の断絶も相当程度は見積もるべきかも知れない。で、原田敦子氏は「日本三代実録(平安時代の歴史書。六国史(りっこくし)の第六。50巻。宇多天皇の勅命で、藤原時平・大蔵善行らが撰。延喜元年(901)成立。清和・陽成・光孝天皇の3代30年間を編年体で叙述。)」の「滋賀郡比良山妙法。景勝両精舎」という記事を引いて、「妙法寺」を「平安前期に景勝寺とともに比良山地に隆盛を誇った南都系の古代山岳寺院のことと考えねばなるまい。」と推定しておられる。「近江国神崎郡高屋郷」はほぼ今の八日市市とされ、「滋賀郡比良山」は和邇(わに)の辺り。「神崎郡」は湖東、「滋賀郡」は湖西に2006年までは名を止めていたが、今はそれぞれ東近江市と大津市に合併されて消滅した地名だ。八日市と和邇とは離れているが、同じ近江国で「近江君」には当たる。そして原田氏は、さらに「続日本後紀(平安前期の歴史書。六国史(りっこくし)の第四。20巻。藤原良房・藤原良相・伴善男らの撰。貞観11年(869)成立。仁明天皇の治世(833~50)18年間を、漢文の編年体で記述。続後紀。)」を引いて、「妙法寺はまさしく法華経読誦であった」と解説し、<「舌疾」は本来、経典読誦には必要不可欠の能力とされていたのではないだろうか。>と、此处の本文に対する読み方を示唆されている。今のところ、私にとって最良の参考文献である。妙法寺の比定は原田説に依拠して言い換えた。ところで別当は、仮にその寺が時の主流派では無いとしても、特権ある寺社領を朝廷から認められた一眞理学閥の総代表であり、高位の僧官である。大徳は偉人である。だから「舌疾」は優れた能力であり、それにあやかっただという理屈でなければ、姫のこういう言い方は、仮に殿の言う「舌疾」の言葉の意味をく出自はともかく、その早口が悪い>と取り違えていたとしても、大徳をひどく貶める下品な悪口になることを承知している文理となり、それこそ自分の出生否定となってしまうので、今姫には出来よう筈のない言い回しだ。この姫の発言

は、本来「舌疾」は読経暗誦では有難い能力なのだろうが、女として、また日常生活に於いては、しっかりと人の話を聞いていないかのような「あはつけき」印象を与える悪い性質になってしまう、と認識している、というような筋でないとなりが成立しない、と私は思う。 *「はべりける」は、高僧が出産場所に偶々居合わせた、ものであろう筈は無い。「はべり」は「用命を受けて仕える」のだから、母方の家が別当大徳に安産祈願を唱えてもらう為に呼び寄せたということだろう。だから「はべりける」は「(依頼した僧が)読経していた」だ。であれば、これも原田考察文に解説されていたが、姫の母方は高僧を呼び寄せるほどの相当な有力者であったに違いない。でなければ、また藤原氏の御曹司が手を付ける筈も無いだろう。とついに没落したらしいその家は、姫が生まれた当時は、ということは藤原殿が時の頭中将だった頃は、藤原氏と距離を置いても自立できた、のだろうか。いや、その藤原氏との反目、ないしは藤原氏でも右家と左家との乗り換えを読み違えた、からこそ没落だった、のかも知れない。 *「あえもの」は「あゆ(肖ゆ)」もの」とある。「肖ゆ」は「似る、あやかる」とある。「あやかる(肖る)」は「感化されて似る」とある。ただ「あえもの」自体には悪い語感はなく、むしろ「手本」のように評価できるものといった良い印象だ。それを故母が「嘆きはべり(悲しんでいて)」という屈折した言い方は、母が実際に嘆いていたらしいことも然り乍ら、悟った僧の暗誦としては秀才を思わせる「早口」を、女の日常生活では「上っ調子」と嫌がる殿に対して「御説御尤も」と追従して見せている、という藤原総代に伍せるほどの、と言っても姫は正にその血を引く娘だが、驚くほど計算高く強かな姫の姿勢の表れなのだろう。作者に何かを主張しようという明確な意図があるのか、面白く筆を運んでいるだけなのかは分からないが、少なくとも藤氏一門として藤氏長者を祭り上げようなどという心算は無さそうだ。「たうぶ」は「たまふ」の音便とあり、此处では話し相手である殿に対する敬意を示す丁寧語だろうが、理屈っぽさをわざとらしいほど強調したかの堅苦しいこの口調は、姫の卑屈さの表現だろうか。それとも「近江」には、藤原氏にとって何か特別な意味を持つ背景があったのだろうか。その点に付いては、原田氏は考察文で踏み込んだ自説を展開しておられるようだが、今の私には南都仏教(奈良仏教)の何たるかなどはさっぱり分からないし、漢文読解力も無く、その熱意も持てない状態で、原田説の理解には遠く及ばない。

と思ひ騒ぎたるも(と姫が思い慌てるのも)、いと*孝養の心深く(母親が直そうとしたのに未だに直していないとは、何とも親孝行の気持ちが深いと)、あはれなりと見たまふ(殿はこうした姫のその場しのぎの卑屈さから苦労したらしい不幸な生い立ちを感じて、これが我が子なのかと身に沁みてお思い為さいます)。 *「けうやう」は「親孝行」とあり、姫も「いかでこの舌疾さ止めはべらむ」と早口を是正する意思表示をしているようだが、私にはこの姫の応答は素直な態度には見えない。が、注には「『集成』は「内大臣の言葉の真意を解せず、素直に応じる近江の君をややからかった言い方」と注す。」とある。ところで、注が言う「姫が「内大臣の言葉の真意を解せず」に居る」という指摘は重要かと思う。「内大臣の言葉の真意」とは、恐らく殿は、姫の舌疾自体に苛立っているのではなく、その話す内容や挙動から窺える姫の育ちの悪さ、品の無さに落胆しているのであり、「もののたまふ声を、すこしのどめて聞かせたまへ。さらば、命も延びなむかし」は「早口の是正を求めた」のではなく「下品さが際立つその早口をせめて止めて欲しい」のであり、「真意」というなら「お前のような出来損ないが我が子とは情けない」と言い放った心算かも知れない。もし其れが「真意」で、姫も其れを理解したのなら、およそ返す言葉など有ろう筈も無い。その意味では、返答をすること自体が「素直」というより「不遜」ないし「おこがましい」。しかし敵も然る者。姫は其の父である内大臣の罵倒になど臆せず、「すこしのどめて」の言葉通りに従って「早口の是正に応じる」態度をして見せた。是を「孝養の心深く」と言う殿の真意の程もまた、この文からだけでは分からないが、「あはれなり」が「残念に」だろうが「健気に」だろうが「これが我が子なのか」と深く実感したとするなら、「孝養」は「からかい」というよりは「皮肉」であり、姫に対する感想ではなく自責まじりの自嘲と見て、また何よりも私自身がこの先を読み進む方向性を得るために、かくも穿ち気味の補語を加えて言い換えた。

「その、気近く入り立ちたりけむ大徳こそは(産まれる時に近くまで立ち入っていたという大徳こそが)、*あぢきなかりけれ(不埒者だったんだね)。*ただ(きっと)その*罪の報いななり(その僧には前世の報いが有るのだろう)。唾(おし)、言吃(ことどもり)とぞ(という早口とは別の言語障害などは)、*大乘誹りたる罪にも(法華経に反した罰にも)、数へたるかし(はっきりと書き出されて、数え上げられているしな)」 *「あぢきなし」は現代語だとく味気ない>と当て字されるが、意味は<つまらない、価値がない>の他に<不当だ、不都合だ>とも古語辞典にある。「不当な者」を「不届き者」と言えるなら<不埒者>とも言えそうだ。ただ、「あぢきなし」の語感は何ともバツが悪い→結果として都合が悪かった>ような印象で、本質的な是非には言及していない、ように思う。多分、是は軽口めいた言い方なのだろう。 *「ただ」は<注釈補足>意味の副詞ではなく、<まさにそのもの、ちょうどそれに似たもの>を示す副詞だ。口語であれば<必ずや、きっと>くらいの言い方になると思う。 *「つみ」は<過ち>だが、特に仏教用語では罪業(ざいごふ、前世の善悪の行為によって現世で受ける報い)を言うようで、此处でも僧に対しての言い方だから、そういう意味なのだろう。「罪」や「報い」は重たい言葉で、その仰々しさが却って軽口に使われる、とは思いますが、寺の別当大徳にこういう言い方が出来るのは、藤原氏ならではかと思ったりもする。しかし、この言い方を以って、大臣が<僧官といえども「舌疾」は「報い」とされる欠点だ、という価値観を持っていた>と見る、のは早計だ。というのは、大臣にとって姫の「舌疾」は軽薄さが際立つから欠点なのであり、何も<早口自体>を否定したワケではない、のかも知れないからだ。が、殿は姫に「もののたまふ声を、すこしのどめて聞かせたまへ」と<早口の是正を求める>言い方をしたしなめたのであり、姫は其れを、自分の全否定と気付いてか気付かずかは定かではなく、したがって作為不作為の判別は読者には付かないが、自分には<早口が似合わない>と曲解ないし誤解して、根元の欠陥たる<品の悪さ>などという概念は棚上げして、というか無視して、というか無縁に、殿の仰せ通り‘素直に’<早口を直す>と答えたのであり、今度は殿がその姫の解釈に‘素直に’逆乗りで被せて、仮に<早口自体が悪い>のなら<大徳こそが悪い>という筋で話を膨らませた。此处はそういう文なのだろう。何しろ、殿は「をこめいたまへる大臣」なワケなのだから、理詰めで物事を量るよりは、時の勢いで調子に乗って面白がる傾向が強そうだし、そういう流れの中で物事の解決を探る、というのが藤原家の遣り方かも知れない。それに、此处までひどい言い方をすれば、姫のオトボケにも釘を刺せるだろう、という本質を突いた計算づくにも見える。が、それでも是は殿の冗談か本心か読みきれない気もして、私にはとても意味が掴み難い文章だ。 *「だいじょう」は「大乘仏教」で<万民救済の仏教経典>のことらしく<特に、法華経をいう>と大辞泉にある。「誹る(そしる)」は<非難する、悪く言う>とあるが、「妙法寺」が法華経の権威だとすれば、この大臣の言こそが「大乘誹りたる罪」ではないのかと思えるほどで、冗談や軽口まじりの皮肉にしても度過ぎた言い方に見えるが、もしかすると、「妙法寺」は法華経の主導権争いに敗れた勢力であり、藤原氏は勝者側に居た、というか、藤原氏を味方にした勢力が首座の地位を得た、という経緯が在ったのかも知れない。

とのたまひて(と仰って)、「子ながら恥づかしくおはする御さまに(我が子ながら恐縮するほど立派でいらっしゃる弘徽殿女御の御方に)、見えたてまつらむこそ恥づかしけれ(この姫の面倒を見て頂くというのは気が引けるものだ)。いかに定めて(中将はどういう心算で)、かくあやしきけはひも尋ねず迎へ寄せけむ(このような如何わしい姫の素性を調べもせず迎えに行つてまで引き取つて来たのか)」と思し(とお思いになり)、「人びともあまた見つぎ(女御に宮中で面倒を見て頂けば、女官たちの多くの目に止まり)、言ひ散らさむこと(姫の悪評はさらに、方々に言い散らされることだろう)」と、思ひ返したまふものから(考え直しなさって)、

「女御里にもものしたまふ時々(女御が里下がりしていらっしゃる都度に)、渡り参りて(そなたはお部屋に伺い申して)、人のありさまなども見ならひたまへかし(女房たちの立ち居振る舞いなどを見習うように為さい)。ことなることなき人も(特に見所が無い者でも)、おのづから人に交じらひ(作法に則ってお仕え申し上げ)、さる方になれば(行儀を身に付ければ)、さてもありぬかし(それなりの格好は付くものだ)。さる心して(そういう心掛けで)、見えたてまつりたまひなむや(女御にお目に掛かってはどうか)」

とのたまへば(と殿が仰ると)、

「いとうれしきことにこそはべるなれ(まことに嬉しいことと存じる所です)。ただ(本当に)、いかでもいかでも(何としてでも)、御方々に数まへしろしめされむことをなむ(御兄弟筋の方々に御身内とお認め頂きたく)、寝ても覚めても、年ごろ何ごとを思ひたまへつるにもあらず(長年この事の外は何ごとをも考え致して来なかったほどで御座いました)。御許しだにはべらば(お近付きをお許し頂けますならば)、*水を汲みいただきても(水汲み仕事を仰せ付かってでも)、仕うまつりなむ(お仕え致します)」 *「水を汲む」は、注に<「法華經をわが得しことは薪こり菜摘み水を汲み仕へてぞ得し」(拾遺集哀傷、一三四六、大僧正行基)を踏まえる。>とある。実際に下働きをしてみる事で、この世の中がどういう原理で動いているのか、という有難い真理の經典を理解することが出来た、という法華經の平等主義を上手く説明した句、ということだろうか。

と、いとよげに(とても上機嫌で)、今すこしさへづれば(さらに少し上ずった調子の声で姫が答えたので)、いふかひなしと思して(殿はこの娘にはどう言っても我が意の心痛は通じなさそうだとお思いになって)、

「いとしか(何もそんな)、*おりたちて薪拾ひたまはずとも(下働きのように自分で薪を拾いながら)、参りたまひなむ(女御のお部屋の様子を見にお出掛けなさればいいのです)。ただかのあえものにしけむ*法の師だに遠くは(ただし、あの肖り物にしたという法華經の大徳だけは遠ざけて、その早口は直しなさいよ)」 *「下り立つ」は<高い所から低い所に行く>という言い方のようで、<直接、自分自身です。>という意味も大辞泉に記されている。「薪拾ふ」は「水を汲む」の引歌にある言い方で、読者に引歌の素養のあることを前提とした作者の洒落た語り口、ということらしい。と同時に、「法華經」という言い方で表現される<平等主義→平民賛歌→下品さ>を、姫がその本質に色濃く有していることを示すかのような書き方だ。穿てば、文化を軽んじるな、みたいな藤原氏の主張にも受け取れる。どうもこういう文は、殿には「法華經」に何がしかの確執が在りそう、に見えてしまう。 *「法の師」は「のりのし」と読みがある。妙法寺の別当大徳である。この人を遠ざけよ、という意味は、姫の解釈上は<早口を治す>であり、殿もその心算でこう言った、ということにする。しかし、殿自身が別当大徳をどのように考えていたのか、特に腹蔵は無かったのか、その辺は分からない。のだが、無い、とも思えない所がややこしい。

と、をこごとにのたまひなすをも知らず(冗談のように言い做し為さる殿の落胆にも姫は気付かず)、同じき大臣と聞こゆるなかにも(最高官たる大臣と天下に知れた歴代の貴人方の中でも)、いときよげにものものしく(大変に美しく立派で)、はなやかなるさまして(華やかさを備えて)、おぼろけの人見えにくき*御けしきをも見知らず(普通ではとても会えない御仁たる藤原殿が事を荒立てないよう配慮為さっている御姿とも思い至らず)、 *「みけしき」は「御姿」ではあるが、

単に見かけの容貌を言うのではなく、何がしかの事情を反映した態度様相を意味する。その事情とは、姫への残念な気分や情けなさを言葉遊びで紛らわせて、穏やかに事態を収めようとする殿の意向、のようだ。

「さて(それでは)、いつか女御殿には参り*はべらむずる(いつ女御殿のお部屋に伺うとしまし
ようか)」 *「侍らんずる」に付いて、注は<枕草子では「むず」を下品な言葉遣いとする。>とある。古語辞典
にも同様の解説があって、「むとす」のぞんざいな言い方だと清少納言は指摘している、らしい。私には武家風の語
感に聞こえるが、それは鎌倉期以降にこの語用が増えたという事情が辞典に説明されてあったことと、どこかで関
連するような気がする。ただ、「むとす」と言ったとしても、殿の返答として成立しているのだろうか。何だか、女
房同士の同僚会話風だ。良くは分からないが、「にようごどの」という言い方も女房言葉に聞こえる。女御を寝殿の
首座に迎えているなら「御殿の君」とか、むしろ明言しないとか、なのではないだろうか。どのように言うべきかは
私には例示できないが、この場合の姫らしい言い方は他にありそうな気がする。

と聞こゆれば(と平然と女房の同僚言葉で殿にお応え申せば)、

「よろしき日などや*いふべからむ(相応しい日などを決めるべきだろうか)。よし(いや)、こ
とことしくは何かは(特に日を選ぶことも無い)。さ思はれば(その気にお成りなら)、今日にても
(今日でも良いでしょう)」 *「言ふ」は日取りの場合なら<取り決めて言い渡す>という意味、だろう。

と*のたまひ捨てて渡りたまひぬ(と殿は話しを打ち切ってお帰りになりました)。 *「言ひ捨
つ」は<言い放したままにする>とあり、会話として遣り取りする言葉ではなく、何かの動作に伴う場面転換の合図
を知らせる言葉のようだ。此处では、話の打ち切りだろう。

[第四段 近江君、血筋を誇りに思う]

よき四位五位たちの(良い身なりの四位五位といった政府の幹部連中が)、いつききこえて(付
き従い申して)、うち身じろきたまふにも(殿がちょっと身動きなさるのにも)、いといかめしき
御勢ひなるを見送りきこえて(とても物々しくなる大臣御一行を姫は見送り申して)、

「いで(まあ)、あな(何て)、めでたのわが親や(立派な我が父親だろう)。かかりける*胤なが
ら(こうした血筋だというのに)、あやしき*小家に生ひ出でけること(我は卑しい小さな家で育っ
たものだ)」 *「胤(いん)」は「たね」と読みがあり「種」だが、「種」が<同類>を意味するのに対して、「胤」は<血
筋を継ぐ者>という意味合いのようだ。 *「小家」は「こいへ」と読み<小さな家、粗末な家>とある。意味はそのま
まだが、今なら「しょうか」と読む。

とのたまふ。五節、

「あまりことごとしく(あまり立派過ぎて)、恥づかしげにぞおはする(近付きにくい気がする
方でいらっしゃいます)。よろしき親の(ほどほどの地位の親で)、思ひかしづかむにぞ(親しくお
世話くださる方に)、尋ね出でられたまはまし(捜し出されなさったら宜しかったのに)」

と言ふも(と言うのも)、*わりなし(主客転倒の屁理屈です)。 *「わりなし」は<理屈に合わない無
理な言い分>だが、此处で五節の発言を<筋違いだ、筋が通らない>とか<強引だ>とか言ってみても、この場面

で是を五節が言う意味を説明できない。五節が、一見したところ一理ありそうな、しかし内大臣家という現実の実利に於いては無用の空論にして、机上の一般論に過ぎないこういう言い方をするのは、つくづく自分および姫の立場が分かっていない、即ち、実際に世話を受けている内大臣家に於いて客観的に不相応(「よろし」くない)なのは自分たちの方だという認識の欠如、こそ起因する。だから語り手としては、是をくこじ付けだ>とかく屁理屈だ>とか決め付けざるを得ない。

「例の(例によって)、君の(あなたは)、人の言ふこと破りたまひて(人の言うことに難癖をお付けになって)、めざまし(意地の悪い)。今は、*ひとつ口に言葉な交ぜられそ(女房仲間のような口の利き方はして下さいますな)。あるやうあるべき身にこそ*あめれ(私はこの家の娘に相応しい身分ある立場なのでしょうから)」 *「ひとつ口」は「言葉」に因んだ言い方だろうが、それ自体で同じ口の利き方>を意味するわけでは無い。「口の利き方」を意味している言葉こそは「言葉」だ。「ひとつ口」の「くち」は「たぐい、類」のように<性質によって分類された事物>を示すのであり、「ひとつ」は<同等の、同種の、同概念のもの>だから、「ひとつ口」は「同類」だ。そして其れは、此处では<同僚女房>を意味する。とすると「今は～な～そ(今は～してくれるなよ)」と否定するのは、かつては今姫と五節は<同僚女房>であったかの言い方ではある。 *「あめれ」は「あんめれ」と発音するらしい。「あるめり(～であるらしい)」の「こそ」を受けた已然形だ。それにしても、自分の立場を「ある」ではなく「あるめり」というのは上品な婉曲には当たらず、惚けた、というか醒めた言い方で、五節に「ひとつ口」をたしなめたものの、是では逆に五節との曲者同士の符丁口調にさえ聞こえる。というか、そんなのだろう。姫の軸足は内大臣家にではなく、五節ともども奉公していた女中時代のままにあるのだ。

と、腹立ちたまふ顔やう(腹をお立てになる顔つきが)、気近く(親しみがあ)、愛敬づきて(可愛らしくて)、*うちそぼれたるは(ふと見せるいたずらっぽい表情が)、*さる方にをかしく罪許されたり(意外なほど魅力的で欠点を隠しました)。 *「うちそぼる」の「うち」は<つい、ふと>などの出し抜け感をいう接頭語。正にこの場面の姫の表情なのだろう。「そぼる」は「戯る」と表記されくふざける、じゃれる、しゃれる>と古語辞典にある。が、「戯る」楽しさが「そぼる」の語感からは得られない。と、辞書で近い言葉に「そぼ濡る」がくびしょびしょに濡れる>という意味で記されていた。何か手応えのある予感だ。で、「そぶ」という語を調べると、「そぶそぶ」が<水が動く音の形容。ざぶざぶ。じゃぶじゃぶ>と説明されている。コレだ。「そぶ」は今の発音で<ざぶ、ざんぶり>だ。水をザンブリと被って<正体を無くした、型が崩れた>状態を言う言葉が、多分「そぼる」だ。だから、澄まし顔を崩す→笑う、なのだが、其処に<じゃれる>要素が加わると<いたずらっぽい表情>になりそう。 *「然る方」は<其れ相応>とある。「をかし」は<趣きがある。見事だ。めでたい。かわいい。美しい。>とある。「罪許す」は<難を隠す>。となると、「さるかた」の「さる」は<一通り、世間並み>では物足りなく、<一角の、身分ある>くらいの意味になりそう。が、姫は身分ある立場に相応しからぬ人物像なのだから、その姫が「さる方にをかし(その身分に相応しく上品だ)」ということは、客観的には<意外に魅力的>なのだろう。

ただ、いと*鄙び(とても地味で)、*あやしき下人の中に生ひ出でたまへれば(貧しい市井で育ちなされたので)、もの言ふさまも知らず(貴人らしい、物の言い方を知りません)。 *「鄙」は「ひな」ではなく「いなか」と読みがある。音読みは「ひ・び」で「卑」とも通じるような語らしい。「都、宮処」に対する概念と考えれば、<全体>に対して<一部分、一地域>、<大勢力>に対して<小勢力>、<既整備>に対して<未整備>、などの印象だ。「みやび」同様に、「ひなび」も「いなかび」も現代語に残っていて、そのままの言い換えでも良さそうだが、此处での意味合いは政治性ではなく文化面に於いて都に遠く洗練されていないということだろうから、「鄙」の<非力性>ではなく<地味性>のことなのだと明示したほうが分かりやすい。「非力」や「地味」は公的な場面では低く評価されることが多いが、ヒトの個人本来の属性であり、「強力」と「非力」、「派手」と「地味」のどちらが社

会や個人に有効なのかは場面によるのであって、これらは普遍の絶対評価なのでは無い。一定の体制を確立して明確な予算配分を持って事に当たるのは大人の責任だ。しかし、体制の固定化は次世代の問題解決の支障となる。大人は今を走り抜けて、未来は子供に託すしかない。こんなことを長々とノートしたのは気まぐれだが、「今」の権現たる藤原家に「鄙一ひな一雛」が抱え込まれているという様相に物語の厚み、または実話の反映を感じるし、必ずや作者にそうした視点ないし意図はある、ように思う。*「あやし」は一音違いの<いやしい>という語感を以って日常的に使われていたかのように、この物語でも良く使われている語に思う。「卑しい」は<身分が低い、下品だ、貧しい>。ただ、「あやし」の原義は<正体不明で不安に思う奇怪なもの>のようで、その意味合いは此处でも消えてはいないだろう。「下人」は「しもびと」と読みがあり<地位の低いもの>の意味らしい。「げにん」というと<家中の下働きのもの>をいうようだ。とはいえ、この文は最高位の貴人たる内大臣家の視点を意識した女房の物言いなのだから、「あやしき下人の中」を真に受けて<奇異で貧しい下層の家>というよりは、少し引いて見た<貧しい市井>くらいが語り手の弁としては妥当な言い換えだろう。「生ひ出づ」は<生まれ出る>または<育つ>とあるが、出生が貧民の女腹というのは殿の身分からして有り得ないので、ここは<育つ>だ。

ことなるゆゑなき言葉をも(大して意味のない言葉でも)、声のどやかに押ししづめて言ひ出だしたるは(声をゆっくりと静かに落ち着いて言い出せば)、打ち聞き(ちょっと聞いただけで)、耳異におぼえ(興味を覚え)、をかしからぬ歌語りをするも(出来の悪い歌入り話でも)、声づかひ*つきづきしくて(声の調子で臨場感を煽り)、残り思はせ(先行きを期待させて)、*本末惜しみたるさまにて*うち誦じたるは(歌の初めと終わりとははっきり聞こえないように口ずさむのは)、深き筋思ひ得ぬほどの打ち聞きには(その歌の深い内容を知り得ないくらいのかじり聞きをする分には)、をかしかなりと(面白そうだと)、耳もとまるかし(耳に留まるものです)。*「つきづきし」は<いかにも似つかわしい、好ましい>と古語辞典にある。が、それでは何のことか分からない。訳文では<しっくりしている>としてあるが、やはり分からない。勝手に<臨場感を煽る>と決め付けた。*「もとすゑをしみたるさま」は訳文に<歌の初めと終わりとははっきり聞こえないよう>とある。踏襲する。「をしむ」は<出し惜しむ、勿体ぶる>かと思うが、訳文の具体的な分かり易さで言葉本来の意味が理解できた。つまり「惜しむ」は、少なくともこの場面では<はっきり聞こえないように小声や不明瞭な発音で物を言うこと>を意味する古語なのだ。言葉から気持ちを読むのも大事だが、事象を的確に理解することは、その前に大事なことだ。*「うち誦ず」は<軽く口ずさむ>。「誦ず」は「じゅうず」と読みがある。「誦」の音読みは今の仮名遣いなら<しょう、じゅ>で、旧仮名でも<しゃう、ず>とあり、「ず」を「じゅう」と発音しても<じふ>の仮名遣いとはならないようで、外来文化に旧仮名遣いの変容の必然性を迫られる側面の一端を垣間見る思いだ。尤も、「誦ず」は「ずず・ずんず・ずうず」と実際には多様な読みがあるらしい。意味は<朗読・朗詠>だから、詩歌・文章の決まり文句を韻を踏んで、とは節を付けて歌い読むわけだ。

いと心深くよしあることを言ひあたりとも(いくら思慮深く裏付けの有る事を言っ居たとしても)、よろしき心地あらむと聞こゆべくもあらず(良い話が聞けそうだと期待すべくもなく)、あはつけき声ざまにのたまひ出づる言葉(軽々しい声の調子でお話しなさる姫の言葉は)こはごはしく(堅苦しく)、*言葉たみて(女中口調で)、*わがままに誇りならひたる*乳母の懐にならひたるさまに(自分の狭い見だけで独りよがり育てた乳母のしつけに馴れ切った態度で)、もてなしいとあやしきに(今姫はその振る舞いがひどく下品なので)、やつるるなりけり(みすぼらしいのでした)。*「ことばたむ」は「のたまひ出づる言葉」の述語なので、「ことば」が「たむ」のではなく「ことばたむ」で一つの意味を成しているはずだ。が、古語辞典には「ことばたむ」の語に説明は無く、「たむ」について「訛む」と表記され<言葉・音声が訛る>と説明してある。「なまる」というと、今だと標準語に対して方言で喋るような語

感だが、当時だと身分差による言葉遣いの違いを意味したのではないか。実際に、姫は女中口調をしていた、ように思う。で。そう言い換える。*「わがままに誇りならふ」は<自分勝手に得意がる>とも言えそうだが、姫の母親が早世し、その実家も没落したとなれば、乳母は自分なりに使命感を持ってこの藤原血筋の姫を誇り高く育てようとした、という事情も考えられる。しかし、片田舎の女房が虚勢を張っても上品なしつけの出来よう筈が無い。乳母は女中の地のままに子供たちをしつけざるを得ない。でも、姫や五節の屈託の無い図太さを見れば、さして卑屈や偏屈に育った風でもない。明石入道のように財を注ぎ込み、意固地になってまで京文化を求めなければ、田舎に<栄誉>は訪れない。それは取りも直さず、中央の栄華は地方の財に支えられていることを意味するが、それが規模の発展を果たした人間社会の組織構造の姿であり、組織を動かす力こそが権力だ。しかし実は、各個人は「宮び」に触れずに育てば、「鄙び」ていることを恥じることさえ知らずに、地道に過ごせる。そんな文なのだろう。*「めものとのふところ」は引き歌がありそうな言い回しだが、何の注釈も無い。「ふところ」は「おふくろ」と同じく庇護されて育つ所であり、その影響下でもある。ところで、この言い方から推察されるのは、どうやら五節が乳母子らしく姫とは一緒に育った仲らしいという事情だ。先に「いとこ」という言い方が在ったが、もしかすると五節は本当に叔母子の従姉妹なのかも知れない。軸足の明示、でもある。

[第五段 近江君の手紙]

いとふかひなくはあらず(今姫は全く教養が無いのではないが)、*三十文字あまり(みそもじあまり、短歌の)、*本末あはぬ歌(上句と下句が上手い対比の言い回しにならないものを)、口疾くうち続けなどしたまふ(語呂に興じた早詠みで矢数遊びなどをなさるのです)。*「三十文字あまり」は古語辞典に「三十一文字(みそひともじ)」に同じとあり、五・七・五・七・七の三十一音で読む和歌、ということで短歌のこと、とある。*「もとすゑ」は<和歌の上句と下句>と古語辞典にある。が、それが「合はぬ歌」とはどういうものか。取り敢えず字数だけで何か言ってみて、面白いものが出来るかどうかを遊ぶ、というのも古典的な幼児遊びだろうし、場合によっては前衛手法かも知れないが、それだけに良い年をしてそういう情熱を持ち続けるのは特異な才能とも思われ、此处では考え難い。まして、韻まで外しては別の話になりそう。となると、一応はお題らしきものを設定して、それなりに意味の通る文句を字数に乗せはするのだろうが、基本形の起承転結が出来ていない、または情感の在る上手い言い回しになっていない、ようなものを、その完成度などを詰める美意識など無しに、語呂合わせを楽しんで数打ちをした、と読んで置く。

「さて、女御殿に参れとのたまひつるを(女御殿のお部屋に伺えと殿が仰ったのを)、しぶしぶなるさまならば(私が渋っていたら)、ものしくもこそ思せ(殿は不快にお思いでしょうから、)。*夜さりまうでむ(今夜にも伺いましょう)。大臣の君(おとどのきみ、大臣の父上が)、*天下に思すとも(畏くもお認め下されても)、この御方々のすげなくしたまはむには(このお邸の御兄弟方が無視なさるのでは)、殿のうちには立てりなむはや(家族とは言えませんかね)」*「よさり」は<夜になる頃>という名詞と古語辞典にある。ただ、此处では<夜になったら>という語感だし、具体的な意味としては<今夜にも>という副詞的な語用に見える。*「てんがにおぼす」は注に<強調表現、大袈裟な言い方。>とある。大臣の威光に与って自分を大きく見せる言い方、なのだろう。此处では、自分も同じ血筋だと言う気負いとも言えそう。

とのたまふ(と姫は仰います)。御おぼえのほど(女御の御評価は)、いと軽らかなりや(何とも低い姫なのですが、)。まづ御文たてまつりたまふ(自分では歌詠みの心得があると自負してか次のように、先ずはお手紙を差し上げなさいます)。

「*葦垣のま近きほどにはさぶらひながら(「葦垣のま近きほど」と古歌にあるように同じ邸内には居りますものの折悪しく)、今まで*影踏むばかりのしるしもはべらぬは(今まで「影踏むばかり」と詠まれた歌のように近づく機会さえ御座いませんでしたのは)、勿来の関をや据ゑさせたまへらむとなむ(その歌にある「勿来の関」のように敷居を高くしていच्छやるのかと、)。*知らねども(勝手に考えて遠慮しておりまして)、武蔵野といへば(また「知らねども」と言えば「知らねども武蔵野といへば」と古歌にあるように、私如きは田舎者の縁者なのでご迷惑かと)かしこけれども(恐縮ですが、御会い致したく存じます)。あなかしこや(ご無礼ながら)、あなかしこや(ご免下さい)」 *「あしがきのまぢかきほど」については、注に<「人知れぬ思ひやなぞと葦垣のま近けれども逢ふよしのなき」(古今集恋一、五〇六、読人しらず)>が引き歌として紹介されている。「葦垣(あしかき)」は葦莖で編んだ間仕切り程度の簡素な垣根で「間近し」の枕詞、と古語辞典にある。引歌の筋は<こんな打ち明けられず思い悩むとは、ごく近くに居ても会えない間の悪さ>だと思ふが、「葦」を「よし」とも読むように、「あしかき」の「悪し」と「あふよし」の「良し」を対比させた言い回しの面白さが、この引歌の生命線なのだろう。引いた意図は<折悪しく>だ。 *「影踏むばかり」については、注に<「立ち寄らば影ふむばかり近けれど誰か勿来の関を据ゑけむ」(後撰集恋二、六八二、小八条御息所)。「勿来の関」は陸奥の枕詞。>とある。「勿来の関」は「なこそせき」と読みがあり、その関所近辺の風情とは無関係に、「な来そ(来るな)」の音遊びで<恋路を邪魔する管理者>という意味の洒落言葉として歌に詠まれたらしい。「勿来」の漢字表記も「ナコソ」の音の後付のようだ。引歌の背景は分からないが字面の筋は<その家を訪ねると貴方は隣に居るほどの近さなのに無粋なヤツが邪魔をして会えない>のようで、何となく不倫や妹狙いの匂いがする。「影踏むばかり」の字句自体は<影を踏んでしまいそうなほど、きわめて近いことをたとえて言う。>と大辞泉にある。 *「知らねども武蔵野といへば」は<「知らねども武蔵野といへばかこたれぬよしやさこそは紫のゆゑ」(古今六帖五、むらさき、三五〇七)。>を引き歌にすると注にある。この引歌は若紫第三章第三段の、盗み出したばかりの10歳とまだ幼い紫君に18歳の光君が手習いをつける場面にも引かれていた。この引歌は字面だけでは<(実際に行って見た事が無いから)知らない所だが紫草の産地である武蔵野は恨めしい、何故ならそれこそ‘紫’に縁があるからだ>というだけで、なぜ<‘紫’に縁があると恨めしい>のか分からないのだが、歌を詠む上での本歌踏襲としては、確か引歌の引歌に<失恋した昔の女が紫を着ていたから>とあるオチだったかと思う。が、「さこそは紫のゆゑ」という言い方には、それが心情にせよ冗談にせよ、それなりの説得力がある舞台背景が必ずや在った筈だが、若紫巻では「紫の紙に書いたまへる墨つき」に引っ掛けた「紫」つながりの言い回しということで済ませて、深入りしなかった。此処でも<私と縁続きなのは恨めしく、さぞご迷惑でしょう>という言い方で引いているのだろうし、「知らねども」で連想する言い回しに過ぎないと考えれば特に掘り下げなくても良さそうだ。姫は突飛な物言いをする人だ。が、しかし、源氏殿がこだわる「紫」に縁がある「武蔵野」を、此処で藤原の今姫が持ち出す意味合いは、ただの姫の突飛さだけなのか。少し気にはなる。

と、*点がちにて(強引な引用歌が多い文で)、裏には、 *「てん」とはこの場合は<和歌などで批評し添削すること>で、「がち」は<過剰>だから、「てんがち」は<あまりにも強引な引用歌が多い>だ。ところで、こういう設定は笑い話の古い類型の一つに似ている。教養の無い者が、聞きかじりの知識をひけらかして得意がろうとするものの、正しく意味を理解していないから失敗して、恥の上塗りをして余計見下される、というオチがつく、というものだ。話の筋や人物像の組み立ても然して複雑では無さそうで、特に面白いものでもない、ようだが、是が実際にそうした場面になりがちな人間関係や社会構成、特に身分違いの世情などを背景にしていると、自分もそれを演じかねない哀れさが身に詰まされて、そうした人物像に心が和んだりする。しかし、稀には此処の例のように、粗忽とは言え、相当な教養を前提にした作爲的なオトシ話もあって、笑い飛ばすには其の登場人物の頭の回転の速さが不気味に思えることがある。しかも、この作者からは、そういう意図を強く感じる。

「まことや(実は)、暮にも参り来むと思うたまへ立つは(日暮れ時にも伺おうかと思ひ立ちまするのは)、*厭ふにはゆるにや(遠慮するほど思ひが募ると言った所でしょうか)。いでや(いえいえ)、いでや(もうもう)、あやしきは*水無川にを(誤字言い間違いは大目に見てください)」 *「厭ふに榮ゆる」は<(出家して)世の中を離れ捨てようと思っているのに、心に反してますます世事に引かれていく意>と古語辞典にある。「厭ふ」を<事態を避ける>と解せば<御会いするのを遠慮するほど会いたい思ひが募る>みたいな言い方のようだ。「にや」は<~ということになるのでしょうか>だが、省略された結びは「侍らむ」らしいので、主語は姫自身となり、是は疑問文ではなく<~といった所でしょうか>という婉曲表現で、「暮にも(今夜にも)」と逸る<会いたい>気持ちを示したもののなのだろう。 *「水無川」は「みなせがは」と読みがある。「みなせがは」は「水無瀬川」と多くは表記されるようだが、意味は<水の無い川、地下を流れる川>とあり「みなしがは」に同じとある。そして「みなしがは」は「水無川」と表記され<天の川、銀河>ともある。どちらも万葉集の昔から歌に詠まれた語のようだが、此処では「見做す」の洒落言葉で「あやしきは(変な文は)見做せ(上手く読み下して)」という意味だけの、特に縁語でもなく単に語呂合わせの、例によって過剰に古歌を引用した語用だ。元より、こういう言い方は精緻な文章を前提に、「水」や「為し」や「何かは」などが印象的に使われた際に縁語として持ち出して、謙遜の体で用いてこそ洒落ているのであり、粗雑な文に用いては無礼を恥じない言い方で無礼を重ねてしまう。いやだから、姫には粗雑の自覚が無いばかりか、精緻な出来栄を自負している、という演出なのだろう。が、当時の宮廷読者なら笑えたかも知れないこの文は、今となつては引用歌・引用文・引用句自体の素養が覚束無い私のような読者には、大変な難文となっている。冗談は生モノだ。が、冷凍モノを解凍してこそ山で刺身が食える。食えている(つもりでいる)内は文句は言えない。

とて、また端に、かくぞ、

「草若み常陸の浦のいかがが崎、いかであひ見む田子の浦波 (和歌 26-03)

「ご都合のほどはいかがでしょう、ぜひお会いしたく存じまするうー (意識 26-03)

*注に<近江の君の弘徽殿女御への贈歌。『集成』は「「いかがが崎」は、「いかで」を言い出す序。河内の国の枕詞(あるいは近江とも)。「田子の浦」は駿河の国の枕詞。第一句「草若み」は、自分を卑下したつもりか。三箇所の関係のない名所を詠み込み、「本末あはぬ歌」の実例」と注す。>とある。駄洒落尽くしの大切り、連想ゲームの類か。とにかく、海つながりでは有りそうだ。「草」は雑草からの連想か、粗野なものであり、それは姫なのだろう。女御を「草」とは言えそうも無い。「若み」の「わか」は形容詞の「若い(幼い、未熟だ)」で、「み」はその語幹の「わか」に付いた接尾語で<~という程度のもの(なので、ですが)>を示す、ようだ。渋谷訳では「未熟者ですが」とある。挨拶文の出だしのような印象で、そこがまた何とも今姫らしくて、従いたい。海つながりの「若草」なら<ワカメ>だろうか。常陸がワカメの名産地だったのか。「日立ちの占」で<近頃の御機嫌>と言えるのか。根拠はともかく、連想でなら<その心算>もアリかも知れない。「田子の浦波」を Web 検索すると古今集 489 番の「駿河なる田子の浦浪立たぬ日はあれども君を恋ひぬ日ぞなき」がヒットする。歌意は<ぜひ会いたい>だ。通せば当歌は<未熟者の私ですが貴方様のご意向はいかがでしょうか、何とかお会いできたらと切望します>という挨拶文を和歌みたいな体裁で言ったもの、のように見える。言い換えは、更にその骨格だけにしたが、「るうー」については下文先取りで、「ただよひたる書きざまも下長に」を真似たツモリ。

*大川水の(宜しくお取り計らい下さい) *「おほかはみづの」は注に<歌に添えた言葉。「み吉野の大川野辺の藤波の並に思はば我が恋ひめやは」(古今集恋四、六九九、読人しらず)。>とある。この引歌は「めやは」

の反語表現として大辞林に例示されていて<見事な川辺の藤並木だが、私の恋心はそんな並のものでは無い>といった言い方になるようだ。そして渋谷訳文も<並一通りの思いではございません>としてある。が、与謝野訳文では此処の引歌に「みよし野の大川水のゆほひかに思ふものから浪のたつらん」（古今六帖 1527、源氏古注・河海抄・孟津抄）を示してある。「ゆほひか、ゆほびか」は<ひろびろとゆったりしている様子>と古語辞典にある。これだと、姫が引く意は<穏便に→便宜を図ってくれ→よろしくお願ひします>あたりか。ところで「み吉野の大川水」で検索すると、万葉集 7-1103 の「今しくは 見めやと思ひし み吉野の 大川淀を 今日見つるかも」がヒットする。これは<今しばらくは見られないだろうと思っていた美しい吉野の大川の悠然たる流れを今日見れたとは>という詠河の土地讃美とあり、引く意は<立派な貴方様に幸いにして見えない>だろう。しかし、やはり「おほかはみづの」の字句通りに引ける古今六帖 1527 番の歌に、私は依拠したい。

と、青き*色紙一重ねに(青い方形紙を折り重ねて)、いと*草がちに(とても平仮名の多い)、*いかれる手の(角ばった字体で)、*その筋とも見えず(手馴れては見えず)、ただよひたる書きざまも*下長に(ふらふらと頼り無い書体は語尾が長く)、わりなくゆゑばめり(むやみに気取っているようです)。 *「しきし」は分からない。手紙だろうから、いわゆるサイン色紙の厚紙の固い方形紙は考え難い。また、「青き」に続けて「色の紙」を言うとも思えない。ただ、「ひとかさね」は<一折したもの>かと思うが、だとすれば<折り紙←いろがみ>のようにも思える。「いろがみ」には<鳥の子紙を5色に染め分けた畳紙(たとうがみ)>という説明が大辞泉にあるが、しかし読みは「しきし」とあるので、短冊形ではない方形の紙、と理解して置く。 *「さうがち」は<仮名交じりの文で、漢字に比べ平仮名(草)が多いこと>と古語辞典にある。 *「いかる」は<角立つ>。平仮名で角ばっている、という幼稚な字の印象だ。 *「その筋」は現代語と同じで<その専門家→それに長けた人>の意味かと思うが、元より姫は書家ではなく、「とも見えず」だから<とても長けているようには見えない→手馴れては見えず>だろう。 *「しもなが」は<文字の下半分が長い書き方。>と注にある。一文字づつに下半分が長いというのも有るのかも知れないが、語尾余白を長く伸ばす書き方のように思ってしまう。

行のほど(くだりのほど、行についても)、端ざまに筋交ひて(下に行くほど傾いて)、倒れぬべく見ゆるを(倒れそうな文面のその手紙を)、うち笑みつつ見て(姫は会心の出来のように笑みを浮かべて見て)、さすがに(それでも手紙の体裁はそれなりに)いと細く小さく巻き結びて(とても細長く折り畳んで小さく巻き結んで)、撫子の花につけたり(撫子の花に付けたのです)。

[第六段 女御の返事]

樋洗童(ひすましわらは、便所掃除の童女)しも(ではありながらも)、いと馴れてきよげなる(姫ととても親しくて顔立ちの良い者が)、今参りなりけり(この文遣いなのでした)。女御の御方の台盤所に寄りて、

「これ、参らせたまへ(これを差し上げてください)」

と言ふ。下仕へ見知りて(台所の下女はこの童女を見知っていて)、

「北の対にさぶらふ童なりけり(北の対に仕えている子供だな)」

とて、御文取り入る(お手紙を受け取ります)。大輔の君といふ(それを大輔の君という女房が)、持て参りて(居室にお持ちいたして)、引き解きて御覽ぜさす(枝からお手紙を解き取って女御に

御覧に入れます)。

女御、ほほ笑みてうち置かせたまへるを(お読みになったお手紙を微笑んで下にお置き為さったのを)、中納言の君といふ(中納言の君という側近女房が)、近くみて(近付いて)、そばそば見けり(横から覗き込みます)。

「いと今めかしき御文のけしきにもはべめるかな(とても新しい書き方のお手紙のようでございますねえ)」

と、ゆかしげに思ひたれば(面白がっていたので)、

「*草の文字は(この平仮名は)、え見知らねばにやあらむ(あまり見馴れない文字の所為か)、本末なくも見ゆるかな(もとすえの合わない歌のように見えますけどねえ)」 *「草仮名」は万葉仮名(日本語の音に漢字を一文字ずつ当てたもの)を書き崩して、平仮名にする過程の省略漢字とある。その崩し方は多様だったらしく、平仮名が現在の48文字の字体に統一されたのは「1900年(明治33年)の小学校令施行規則の第一号表に示され」て以来だと Wikipedia にある。つまり、それ以前は万葉仮名自体も多種多様であり、その草仮名文字も多種多様であり、普遍性に於いては楷書漢字が最も優れていた文字だったらしい。だから、今と違って確かに平仮名が読み難いという事情は在ったようだ。とはいえ、一定範囲内の共通平仮名は便利に使われていただろうし、此処の女御の言い方は嫌味ぎりぎりの揶揄、皮肉ではあるだろう。

とて、賜へり(女御は中納言の君にお手紙をお渡しなさいます)。

「返りこと(返事も)、かくゆゑゆゑしく書かずは(このように古歌を持ち出して尤もらしく書かないと)、悪ろしとや思ひおとされむ(教養が足りないと蔑まれましょう)。*やがて(よく読んで同じような具合に)書きたまへ(あなたが書いてください)」 *「やがて」は現代語だと<暫くして>だが、古語では寧ろ<そのまま、すぐに>であり<それがこうなるように→同じように>という語感のようだ。手紙を渡しながら言ったのだから<是を見て、返事が同じようになるように>という言い方、なのだろう。与謝野訳文に従う。

と、譲りたまふ(任せなさいます)。もて出でてこそあらね(主人筋のことなので、表立ってではないものの)、若き人は(若い女房は)、ものをかしくて(成り行きが可笑しくて)、皆うち笑ひぬ(皆含み笑いをしていました)。御返り乞へば(遣いの童女がお返事を待っているのを)、

「をかしきことの筋にのみまつはれてはべめれば(名所の歌ばかりを引いてありますので)、聞こえさせにくくこそ(是に見合うお返事となると、申し上げるのも難しいと)。*宣旨書きめきては(とって用件だけを、仰せ書きのようにお返事したのでは)、いとほしからむ(失礼ですし)」 *「宣旨」は帝の御下命文を書記が書式に則って記した公文書。「宣旨書き」は「宣旨」のように、主人の仰せはこうだという書き方を女房がする<仰せ書き>で、代筆であり、代筆で有る事を明示する書き方であり、今姫とはいえ主人筋の御方には無礼に過ぎる。

とて(と中納言の君は)、ただ(まるで)、御文めきて書く(女御のお返事のように書きます)。

「近きしるしなき(仰せのように、近くに居る甲斐もなく)、おぼつかなさは(知り合えないのは)、恨めしく(残念で)、

常陸なる駿河の海の須磨の浦に、波立ち出でよ管崎の松」(和歌 26-04)

無駄に過ごした年月を、水に流して松並木」(意識 26-04)

*注にく「常陸の浦」「田子の浦波」の語句を受けて、「常陸なる駿河の海」と返し、また「須磨の浦」「管崎の松」という歌枕を詠んで返す。「松」は「待つ」の掛詞。「波」と「立つ」は縁語。歌意は「立ち出でよ」「待つ」にある。>とある。「管崎(はこぎき)の松」は<筑前博多の管崎八幡宮前の松原>で玉鬘第三章第一段の岩清水八幡詣でに因んで、玉鬘が九州時代にお参りしていたと書かれていた。古歌引用の言葉遊びを、即座に古歌引用の言葉遊びで返す。本当に大喜利合戦だ。多分、<日経ちなる耗るがの憂むの済まの占に(何日も無駄に過ごした憂いを掃う気持ちに)並み立ち出でよ早来先の待つ(共に成って思い切って早く来て下さい私は先に待っています)>みたいな。

と書いて、読みきこゆれば(読み聞かせ申しあげれば)、

「あな、うたて(まあいやだ)。まことにみづからのにもこそ言ひなせ(本当に私の歌だと人が言いなしたら、どうしましょう)」

と(女御は)、かたはらいたげに思したれど(きまり悪そうにお思いになったが)、

「それは聞かむ人わきまへはべりなむ(それはこの歌を聞いた人なら冗談だと分かることです)」

とて(と言って中納言はそのまま)、*おし包みて出だしつ(公文書のような立て文にして今姫に出しました)。*「おし包む」は注にく『完訳』は「正式な書状の形式の立文にした。女同士の文通には用いない」と注す。>とある。大辞林には<念入りに包む>という説明しかないが、薄紙で包んだ「包み文」が恋文の形らしいので、その対比として「正式な書状の形式の立文」は説得力があるし、その仰々しさが面白いので、従う。

御方見て(お部屋の今姫はこの返事を見て)、「御方」は注にく近江の君をさす。「御方」という敬語表現が皮肉。>とある。ただ、今姫は大臣に北の対に部屋を宛がわれた「御方」には違はなく、中納言の君にしても「御方」に宛てて返事を出した、ということではあるのだろう。しかし、それは台所で待っていた便所掃除の子に託された。やはり語り手としても、これくらいは皮肉るか。

「をかしの御口つきや(上手い御詠み方だよ)。待つとのたまへるを(待つと仰ってるわ)」

とて、いと*あまえたる薫物の香を(とても甘ったるい香料を)、返す返す薫きしめりたまへり(何度も着物に焚き染めて、ご訪問の準備をしていました)。*紅といふもの(少しで目立つ、紅という化粧染料を)、いと赤らかにかいつけて(真っ赤になるほど頬に塗りつけて)、*髪けづりつくるひたまへる(髪を櫛でとかして化粧なさった姿は)、さる方ににぎははしく(ともかくは派手ではあり)、*愛敬づきたり(可愛らしくはしていました)。御対面のほど(御対面の際には)、*さし過ぎたることもあらむかし(思わぬ失態があるかも知れません)。*「甘ゆ」は<甘みがある。甘い香りを持つ>とあるが、<あまえる、親しみなれていい気になる、囃に乗る>とも古語辞典にある。そのまま現代

語の「甘い」に引き継がれてもいる。恐らく、子供っぽい、風格を損なう香りだ。 *「べに」は口紅・頬紅で、当時なら口は付けても小さくだろうから、此処では専ら頬紅かと思う。また、「かいつく」の「かい」は「掻き」の音便で強調の接頭語だから、「掻い付く」は<むやみに塗りつける>。恐らく、子供っぽい道化じみた化粧だ。 *「けづる」は<髪を櫛で梳く>。「髪」の読みは「くし」ではなく「かみ」とある。 *「あいぎやうづく」は<顔かたちに可愛らしさがある>と古語辞典にあるが、素直にそう読める書き方には見えない。「さる方に」は此の語にも掛かっているとすれば、何処か人に媚びた、その実、素顔を隠した、かの計算高い曲者ぶりを感じる。で、<～はしていた>と作為を匂わせた。 *「差し過ぐす」は<度を越す。出過ぎる。>と大辞泉にある。「差す」は<差し込む、入れ込む>の前のめりの語感で<思わず～してしまう>の意味かと思う。「さし過ぐしたること」は<思わぬ失態>で良いだろう。

(2011年4月15日、読了)